慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社會學, マツキイバア著, 井上吉次郎譯
Sub Title	
Author	若宮, 卯之助(Wakamiya, Unosuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.144(622)- 146(624)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、王府に祖先の墳墓の遙拜所を造らしめ、其神官として大アムシラレと云ふ女子を任命した。此大アムシラレが、大勢のノロクモイ卽ち地方の女の神官を支配し、政治上かなり重要な位地を占めてゐた。此等の人爲的に出來上つた神官の下に更に自然的に成立した根人（ネッチュ）なるものあり、之は根神卽ち氏神に仕へる神官であり、支那古代に於て祭祀のある毎に設くる尸に相當する。その外に口寄を職業とするユタなる巫祝があり、政治上に多大の勢力を振ひ、時の爲政者を惱ましたのである。

然しかゝる民族的宗教は、儒教の影響、島津氏の入冠に伴ひ、次第にその勢力を減じ、遂には政治上の圏外に放逐せられ、もつて明治維新に及んだ。

著者は以上の事實を內地人の得難い豐富な史料に立脚して說明しておる。琉球の歷史に闇い自分は、之に對しとやかくの批評を下し得ぬが思ふに比較的近世まで古代日本と共通なる原始文化が保有した琉球人の歷史は、古代日本人の文化史を文獻以外の材料から闡明しやうといふ者に多大の裨益を與へてくれるものであらう。願はくば本書を魁として將來眞摯なる琉球研究の書の續々現れて我國古代史の上に光明を與へむことを希望して止まぬ者である。（松本信廣）

社會學（マツキイバア著　井上吉次郎譯）

本書は『大阪每日』の井上吉次郎氏が、トロント大學のマツキイヴア敎授の Community を譯したものだ。譯者は曰く、原書の價値、原著者の人物、譯者適否の資格等に就いては、譯者の學界讀書界の先達にして尊敬する友人早稻田大學敎授杉森孝次郎君に卷頭へ述べ貰ふことにした。杉森君の保證で讀者に薦めやうと云ふ考へである、と。

然しながら其の杉森氏は、『社會學』と題して譯版された本書が、社會學思想の歷史とどんな關係を保つかに就いて、何事をも語つて居ない。杉森氏の所謂推薦理由は多く語つて何物をも發表して居ない點で正に外交家の修辭だ。『著作の內容は、いかにも歐洲戰を見たのちのものらしい時代的適切と、戰後の世界的改造運動の一大指導力たる價値を明確に具有して居た事が、先づわたくしの、その著に對する敬意を增した』とか。『歷史的な理想的一全體としての社會に於ける國家の位置は、氏の著に於て新に問題とされ、そして新に据えなほされた觀がある』とか、氏の著には思想がある。研究と考索がある』とか、『氏の精神は正しい、それは創造的だからだ、建設的だからだ、完成的だからだ』とか云ふのは、推薦理由としては、殆んど無意味である。何となれば、是等の抽象句は、戰爭前後のどんな政治書にも、殆ど其儘に適用ができるからだ。杉森氏は、本書の性質が何であり、其の中心思想が何處に在るかの事實問題に觸れて居らず、其の長短得失を自分量の秤にさへかけて居ない。――そこで小生は、推薦とは別の理由を以て、本書の內容を略評に試みる。

本書は原序の譯を怠つたが、それに據ると、著者は、曾て社會學の成立を疑ふた人である。其の初期の論文は、經濟學と政治學の外に獨立のできる社會學はないと云ふ意見を發表したものだ

さうだ。此の反對意見は、久しく歐洲諸國に行はれて居た。その爲めに近代社會學は、此間までアメリカニツシエと貶稱されて居たのである。其後に著者は改宗した單に。改宗した許りでなく、自ら社會の大祖師ででもあるやうな驕揚な態度で出直して來た。それが本書である。

本書は、到底、英人の社會學だ。英人の社會學には絶えず政治的偏執が、附き纏ふて居る。スペンサの前代からホブハウス、ウオラスの今代まで、英人の社會研究は、常に實際政治の直接の得失と其の眼界から離さないで居る。英國の大學で社會研究と云へば、一先づプラトンの『共和國』から出立すると云ふ流儀が久しく行はれて居る。隨つて國家の性質とか必要とかを、教會及び家族に對照して研究することが學者の注意を集めるのだ。此の政治的偏執が、一般の社會研究を彩色するのは、英國では偏に歴史の隋力だ。本書の著者が、社會學を特に Community と題して國家に特別の重量を認めやうとしたことなども、明に其の政治的偏執の一例と見られる。

此の『コムミユニテ』は、學者に依つて用法が同じでない。或人々は、家族、氏族、部族、民族等自然に發達した強制的團體を任意的團體と區別してコムミユニテと呼むで居る。他の人々は Society と同義に解して居る。普通の例に從へば、コムミユニテは市町村府縣等の如き限地的共同生活を指し、抽象的の內的關係を中心とする任意の共同生活をソサエテと稱して居る。ソサエテは同時に包括的である。一切の人間關係はソサエテの關係と呼ぶことができる。隨つて、一切のコムミユニテは、悉くソサエテに含まれるが、一切のソサエテが、コムミユニテであることは出來ない。そこで社會の分類の爲めに新に使用されて流行となつた言葉が Group である。此のグループは社會を分類する自由なる言葉である。言葉として便利であるに止らず、此のグループ概念は、社會學の諸流派を統一するに至るかも知れない。所謂社會の問題の大部分は、グループ對グループの問題である。此の言葉のグループはどんな團體にも適用が出來る。人間の共同生活の一般研究としては、コムミユニテよりも、ソサエテの方が名稱として適切である。此の點には、最早、議論がない。本書の著者が、如何にその雄健な筆力に任せて强辯を試みても、此點は動かせない。次ぎには、本書の中心思想だ。

本書は、嚴格な意味の社會學でなくて、一種の歴史哲學である。卽ち社會發達の原則を定式しやうとするのが本書の目的である。其の所謂原則は、――社會化と個性化とは同一過程の兩面である、と云ふことに歸する。碎いて言へば、社會が進めば、進む程、個性內容が進步すると云ふのだ。社會が大きくなつて個人が小さくなるやうなことは、進步として有り得ないと云ふのだ。著者は、其の根據として Civilization と Culture とを別けて居る。著者に據れば、前者は物的、外的の團體的技巧であり、後者は心的、內的のインテレストである。卽ち外界の組織と內界の要求との二つを立てゝ、所謂進步は、其の內界のインテレストに依つてのみ測定ができると斷じたのである。社會學の盛でない英國で倫敦タイムスの附錄がどんな評價を下さうとも、此の斷案は全く遼東の豚だ、其の斷案には何等の新味がない。他人が既に言ひ古るした

事を、著者が尤もらしく、鹿爪らしく、卽席料理的に扱つたに過ぎない。强ひて新味を求めたならば、其の新味は著者の用語の不精確であり、其推論の森嚴を缺いたことである。Collective mind を三百代言的に極力否定しながら、自分は Common life といひ、Common Will と平氣で書いて居るのは、どうしたのだ。本書の著者と、マクデユガル教授との間に起つた其の Collective mind に關する爭論は、殆んど十年に亘つて居るが、著者の三百的論法は、未だに尾を曳いて居る。要するに、本書は、初學者への入門としては、偏見に富むで居るし、專門家の參照としては、新味を缺くと同時に餘りに前賢を無視したのが弱點である。

最後に譯文を一言する。譯者は、普通に運べば五百頁になるものを其の半額に壓搾した。多少の無理は、問題でないが、譯語の苦心は察するに餘りある。『一如』、『行者』、『物界法』等の如き佛經語の轉用は其の證據だ。（若宮卯之助）

支那文化叢書第一編　支那民俗誌上卷（永尾龍造著　滿洲考古學會發行）

過日、大連なる著者より上述の書一卷惠贈せらる。著者は卷首に本書上梓の趣意を次の樣に述べて居られる。『滿洲位我が同胞に誤解されて居るところは有るまい。又支那位我が同胞に親しみの少ない國はあるまい。我が同胞の眼は皆歐米に注がれ、心は皆その方へ引かされて居る。何んとかして此の弊を矯めなければならぬ。といふ事が吾々同志の間に考へられ始めた。理窟を云つても始まら無い。趣味を以て導かうでは無いかといふ相談の下に、支那文化叢書は生れる運びに成つた。そして其結果一番始めに選び出されたのが本書である』と。

本書收むる處の記事の大半は初め『雜誌滿蒙の文化』に連載されたものなるが訂正增補の上本年二月中旬始めて單行本として滿洲考古學會より發行せられ去月上旬迄に三版を重ねたるものである。本卷には支那の年中行事主として正月の部を取纒められてある、爾餘の行事に關する記事は續いて上梓さるゝ模樣である。上、中、下、外、篇の四ツに分たれ、更に細別すれば、

上篇「春立つ頃」

一章、立春――はしがき、立春の儀式、春牛、芒神、迷信、

二章、竈祭り――はしがき、竈神の昇天、竈神の祭、竈君昇天の通路、竈祭は男子の祭、神樣の下界調査、竈祭の日につきて、竈祭の由來、竈神の身分、竈祭と迷信、

三章、除夜――除夜、財神賣り、接神の禮、注意すべき起居動作、山京苦力の留守宅、押歲錢、除夜雜俎、宮中の歲末、

中篇「年の始」

一章、正月氣分――はしがき、桃符、柳、春聯、福、蝙蝠の話、門神、鍾馗、門松、水を沒まぬこと、掃除せぬこと、封印、爆竹、

二章、元日――はしがき、封門、開門、元日早朝の儀式、天地を拜すること、四方の神を拜すること、家堂を拜す、竈君を拜す、貧乏神落し、廻禮、